

## VIII おわりに

手書き速記は、発せられる言葉を発生とほぼ同時に固定し、そのあと読み返して文字に変換する活動であると、速記者は考えてきた。その速記は、言語に適応する合理的な知識システムであり、一方それを使いこなすスキルを得て実際に利用される。

符号改良を目指す研究者は、言語音に対する図形資源の配分を最適化して、最小の筆記負担で最大量の言葉を表す速記理論を組み立てようとする。教育者は学習性のよい指導法を研究し、必要な規範符号体系を最小の負担で習得させる訓練を追求する。

20 世紀末には世界的にみて相対的に速記の学習負担が大きく感じられるようになり、技能試験の合格率低下等もあって、速記離れが世界的に進んできた。一方、手書き速記の学習者が符号を正確に速く筆記し、確実に反訳する練習につとめても、技術革新の進行によってアメリカでは速記秘書はアドミ administrator に代替された。

日本国内では議会市場において定員制から外部化が進められ、それに対応する大手速記会社による市場寡占化が完了した。生産性を高める点で、個人経営の速記者は競争力を失っており、黄金時代に謳歌した職場がほぼなくなり、職業としての速記は衰退した。

文化として見れば速記は広い文字体系の一領域にあり、高速筆記を可能とする機能性文字である。そして速記は、評価が難しい知的技能要素があつて成果をあげるものであり、日本語の速記方式理論を客観的、科学的に評価する上で難しい一面がある。

経験的に見て、学習意欲を高められる教育者は、速記の成功者を輩出しやすいようだ。

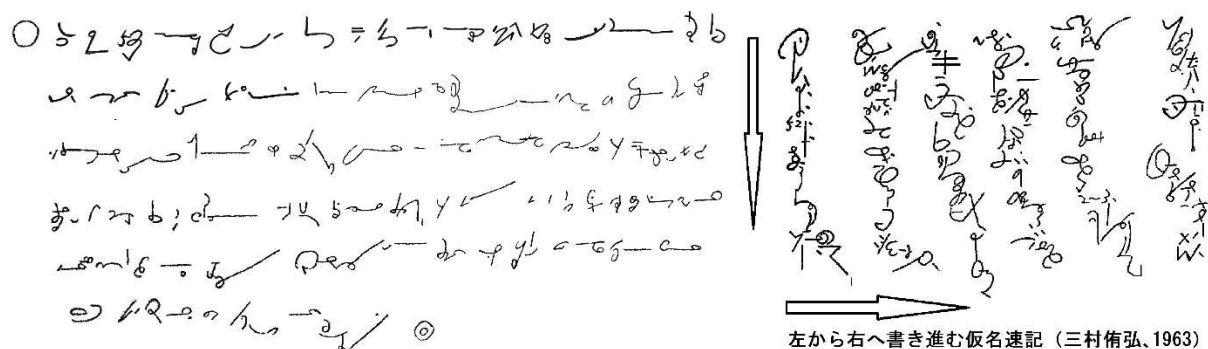


図 2-132 同一文を符号式(左：衆議院単画符号)と仮名式(右：三村式タテ書きカナ速記法)で書いた文例

日本語の符号式、文字式速記法ともに、畑田明が言う「それは詰まるところ手指の回転運動にほかならない。速記は求心力によって書かれる」ものであり、その方式を巧みに操る者の書法を手本にして練習することが経験的には成功率がよい。手書き速記は理論的に高度なレベルに達したが、技術革新、経済価値の挽回面で課題に直面しており、新しいパラダイムに立ち向かうべき時代へ入っている。

本稿をまとめるに当たり、各方式の理論等についてご協力をいただいた方の氏名を次に

挙げて謝意を表したい。明石文雄, 荒木章, 石川吉正, 石河勝彦, 石村善左, 石渡潔, 稲垣正興, 植田裕, 岡本隆博, 加古修一, 川口晃玉, 顔廷超, 北川暉基, 樟根重和, 小出邦彦, 小谷征勝, 小西佐都志, 小林多聞, 西来路秀男, 佐賀田徹, 佐竹康平, 瀬戸豊, 高橋健吾, 高橋恒治, 高橋正喜, 武部良明, 田中星子, 寺井美己, 唐亜偉, 鄧方晟, 豊岡敬人, 中田知, 中根正親, 中根正世, 中根康雄, 中村優里, 西村泰一, 橋田光雄, 東野裕一, 平野明人, 前野貴子, 真木敏郎, 真下真, 三牧勉, 宮田仁子, 宮本修一, 森卓明, 山口庄治, 米田陽子, 両下昌三, Boris Neubauer ほかの諸氏。

(図版)

図 2-1 初期日本語速記法と母式の影響 兼子次生作成: 参考文献は、「日本速記方式発達史」1942, 武部良明, グレイアム式は第 1 図, ピットマン式は第 19 図, リンズレー式は第 5 図, 田鎖式は第 2 図, 黒岩式は第 6 図をもとに兼子次生が作成した。

図 2-2 田鎖式初版と黒岩式の基礎符号比較表: 黒岩式の基礎符号は、「議事演説討論傍聴筆記新法全」, 1883. 7, 黒岩大, 日置益訳補, 神田乃武校訂 p15, 16 から, 田鎖式は「傍聴筆記新法獨學全」1884. 12 清澤與十 p1-5 から兼子次生が作成した。

図 2-3 田鎖式初版と黒岩式の比較文例: 「速記術大要全」林茂淳 1885. 4. 15 の p8-9 から引用した。

図 2-4 同行縮字法の萌芽: 「実験改良速記術独学」1887. 4. 4 丸山平次郎の p68, 69 から引用した。

図 2-5 清澤版「傍聴筆記新法獨學全」表紙: 1884. 12, 清澤與十。

図 2-6 「ことば乃寫法」表紙: 1885. 11. 13, 丸山平次郎。

図 2-7 幾何派の符号生成源素図例: 「傍聴筆記新法獨學全」1884. 12 清澤與十の p1-2 から引用した。

図 2-8 文節単位の筆記が早期から工夫された: 「ことば乃寫眞法」1885. 11. 13 丸山平次郎 P. 62 から引用した。

図 2-9 丸山版と清澤版の基礎符号 兼子次生作成: 「ことば乃寫眞法」1885. 11. 13, 丸山平次郎, 「傍聴筆記新法獨學全」1884. 12 清澤與十 を用いた。参照した英文速記法のアルファベット符号をもとに工夫している。

図 2-10 べた文を読みやすく区切る工夫例: 丸山版「ことば乃寫眞法」1885. 11. 13, 丸山平次郎 P62 から引用した。分かち書きしない日本語をべた書きすると書きにくく, 読みにくいので, 英文速記のように分かち書きする方法を選んだ。

図 2-11 早期の速記符号の連綴状況: 「傍聴筆記新法獨學全」1884. 12, 清澤與十 p8 から引用した。文字, または単語単位の読点を振る工夫が見られる例。

図 2-12 現存する最古の速記符号: 矢野文雄口述, 若林珣蔵速記「経国美談後編」1884 巻末 p2-3 から引用した。

図 2-13 田鎖式初版成案に至る過程 武部良明 「速記概説」1948. 5. 3.

図 2-14 音節符号の生成法 田鎖式初版: 「傍聴筆記新法獨學全」1884. 12 清澤與十では, 父音(ア列の音を呼ぶ)に母音サイン符号を音順に連ねて音節符号をつくっており, 日本語速記法の基礎符号の生成にはこの方法がとられた。

図 2-15 衆議院単画符号における逆記法: 「逆字」の例は田鎖一「日本速記法」1950. 11. 3 P. 61 から引用した。

図 2-16 田鎖式 3 代基礎符号変遷表(田鎖綱紀, 田鎖一, 田鎖源一) 兼子次生作成: A 田鎖綱紀の 1882 年初版は林茂淳「速記術大要」p5 から, B 新田鎖式 1893 年版は綱紀「田鎖新式速記術」1904 年発行版, D67 年式は一「日本速記法」から, E1976 年版は源一「速記 6 ヶ月コー

ス」1981年発行版から、それぞれ兼子次生が作成した。

図 2-17 三遊亭圓朝「怪談牡丹燈籠」に掲載された若林珣蔵の速記符号：1884.7, 圓朝口演, 若林, 酒井昇造速記による初の講談速記本に、語り始めの速記符号が13巻のうち6巻を除いた巻の表紙裏に速記符号が掲載された。復刻版から引用した。

図 2-18 福岡隆(新田鎖式)速記文例(松本清張「砂の器」口述速記)：速記110年記念事業「速記符号集」に回答があった福岡の田鎖式符号#076を引用した。

図 2-19 田鎖一の速記符号文例：鳥取県速記士会報2月号1955.2.8の調査特集「全国主要速記方式符号紹介」記事p17から引用した。

図 2-20 ある時期における国会速記者の方式系統の実態：若林珣蔵の符号は「速記術大要」林茂淳のp8から、佃式は佃与次郎が教本を発行しなかったので1912年に学習した榊原清の資料を用い、衆議院第一期は衆議院速記者養成所80年史口絵「符号の変遷(1)」から、貴族院第1期1918符号は貴族院速記練習所・参議院速記者養成所80年史のp44や教本を参照して兼子次生が作成した。

図 2-21 衆・友野茂三郎のダイナミックな直筆：速記110年記念事業「速記符号集」に収録された衆議院速記者の直筆符号p80から引用した。

図 2-22 衆議院式の符号変遷表 兼子次生成成：「衆議院速記者養成所80年史」口絵 符号の変遷(1)(2)を画像処理して作成した。

図 2-23 石川隆一の速記符号文例：速記110年記念事業「速記符号集」に収録された衆議院速記者の直筆符号(p83)から引用した。

図 2-24 森田章三の速記符号文例：速記110年記念事業「速記符号集」に収録された衆議院速記者の直筆符号(p82)から引用した。

図 2-25 田鎖式から貴族院式・参議院式への基礎符号の変遷：「貴族院速記練習所・参議院速記者養成所80年史」442p, 統一式は折衷式(統一)として収録された符号である。兼子次生が編集した。

図 2-26 参議院19期生の単画符号の文例：速記110年記念事業「速記符号集」に収録された参議院式速記者の直筆符号(#068)を引用した。

図 2-27 最終期の貴族院複画符号の文例：速記110年記念事業「速記符号集」に収録された参議院式速記者の直筆符号(#015)を引用した。

図 2-28 参議院式折衷符号の完成者, 山田到の符号文例：鳥取速記士会会報「全国主要速記方式符号紹介」1955.2の直筆速記文例, p17. を引用した。

図 2-29 参議院式新折衷式の符号文例：速記110年記念事業「速記符号集」に収録された参議院速記者養成所卒業生の文例(#046)を指導時期から判断して引用した。

図 2-30 (1)貴族院式・参議院式の符号文例：貴族院速記練習所・参議院速記者養成所において指導した速記符号の変遷(複画式は貴族院一期生から参議院三期生まで), (参議院四期生から折衷式, 単画式を指導), (四十一期生から新折衷式の統一符号)「貴族院速記練習所・参議院速記者養成所80年史」から兼子次生が整理し, 引用した。

図 2-30 (2) 貴族院式・参議院式の符号文例：「貴族院速記練習所・参議院速記者養成所 80 年史」から引用した。

図 2-30 (3) 貴族院式・参議院式の符号文例：「貴族院速記練習所・参議院速記者養成所 80 年史」から引用した。

図 2-30 (4) 貴族院式・参議院式の符号文例：「貴族院速記練習所・参議院速記者養成所 80 年史」から引用した。

図 2-31 ガントレット式の符号文例 森上富夫による：速記 110 年記念事業「速記符号集」に収録された衆議院速記者、森上富夫の直筆符号 (p82) を引用した。

図 2-32 ガントレット式、熊崎式、武田式、中根式の基礎符号表：ガントレット式は森上富夫「ガントレット式日本語速記術」1934. 10 版の p32、熊崎式は熊崎健一郎「熊崎式速記術」の p31-179 から符号を抽出、武田式は武田千代三郎「武田式全画体速記法」1996. 8. 18 版の p16、中根式は中根正親「中根式速記法講解」1916. 2 の p21 の基礎符号を用いた。

図 2-33 電話速記に用いられた複折 3 速記方式：衆参両養成所から採用されたほか、熊崎健一郎の熊崎式を独習した者らが応募した。「日本速記五十年史」、毎日新聞社「新章 80 年史」などを参考にした。

図 2-34 牧泰之輔の改良符号の変遷(熊崎式⇒新熊崎式⇒超熊崎式⇒牧式⇒新牧式) 兼子次生作成：牧は熊崎式を学んだ後、民間速記者として地方議会の速記や後進の育成のかたわら、速記理論の改良研究につとめた。著作は「牧式和英六十字速記術」1927 年、「牧式速記術講義録」1928 年、「超熊崎式速記術初歩」, 「牧式速記術初歩」1938 年などがある。符号変遷はかっこ内に書いたように進んだが、紙質、印刷法などから良質の教本はほとんど残されていない。

図 2-35 牧泰之輔の熊崎式改良の経過：熊崎式のウ列音を単画化する点や、第二符号を設けるなど符号の変更があった。

図 2-36 早稲田大学速記研究会の第一期単画符号と第二期折衷符号, 兼子次生整理：単画早稲田式(第一期「早稲田式初歩の速記学」)のテキストは、田鎖式二代目の田鎖一が学生の要請を受けて応援した関係で田鎖家に残されていた。三代目の源一は「単画早稲田式は、速記界の理解と協力がうまくまとまらなかった」と語っていた。単画式の夢が消え去ると、川口が温めていた折衷式(第二期早稲田式速記学)が浮上して盛り上がっていったと見られる。

図 2-37 早稲田式の速記文例：鳥取速記士会報「全国主要速記方式符号紹介」1955. 2 の直筆速記文例にあった川口晃玉の符号 p15 を引用した。大阪早稲田速記専門学校長、石川吉正の言によれば、川口晃玉は日本速記協会検定試験 A 級に合格していた。

図 2-38 速記の最初の通信教育 ピットマン式のペニー・プレート：ピーター・ピットマンから兼子次生へ贈られた複製ペニー・プレートを縮小した。

図 2-39 早稲田式と佐竹式の主要符号の比較表 兼子次生作成：符号は「早稲田速記研究・研究編」1963. 8. 1, p10-11, と「佐竹式速記学習コース 1」p15 を用いた。佐竹式は 10

符号を変更しており、斜めの符号をより寝かせているなどが特徴的である。

図 2-40 米田式初期の符号変遷表(1949, 1950, 1952 年版) 兼子次生成成：二段目が新米田式への試行符号, 1952 年版で初版に回帰した。米田式教本としては, 1949 年「熊崎式発展日本語標準速記法」を出発点として, 1950 年版「新米田式速記法実用編(1)」で衆議院式, 国字式, グレック式などの符号を取り入れた。大小正円と小楕円(カ・ン, イ・ク・ニ, ケ・コ), 小半円(ミ), 丸カギと曲線(シ, ノ, ヘ, ホ, ル, ロ), フック記号(ヌ, ム), 最短線化(キ, ク, チ, ノ, ユ)のほか, 複数符号の採用(ウ, キ, ク, ノ)が図られて熊崎式の面影がなくなったが, 1953 年版「米田式速記法実用編」1952. 10. 20 で初版にほぼ復帰した。その後「米田式速記法運用編(第一分冊)」1953. 1, 「同(第二分冊)1954. 3. 1, さらに1954 年版「米田式速記法実用編要約(改訂版), 1960 年版「詳説米田式速記法第一分冊」1960. 5. 10, 1972 年版「総合速記講座総論編」, 最終版は仮名速記の「ビジネス略記法」(未完)であった。

図 2-41 米田式の文例 山口庄治「速記符号集」#095 1993. 9. 1

図 2-42 米田式における基礎符号の改編歴：各教本から抜粋, 兼子次生成成：

図 2-43 経済の高度成長期に折衷派の改良方式が続いた。日速研式(大阪)とコクサイ式(京都)兼子次生成成：吉崎健太郎「日速研式速記教科書」1972. 2 の第 2 巻 p24 の基礎符号, 中村優里(えつ)「速記テキストブック I 上下」1967. 4. 1 の p18 の基礎符号を用いた。コクサイ式は基礎符号のダイヤグラム, 用語が植松尚男「すぐ役立つ, 速記の学び方」1959. と類似し, 田鎖式系の方式と判断される。一方, 吉崎の日速研式は早稲田式と類似しており, 例えば[ア], [イ], [ウ], [エ], [オ]は同じ符号, [ク]には[コ], [ス]には[ソ], [ヌ]には[ノ], [フ]には[ホ], [ム]には[モ], [ル]には[ロ]を充て, [ソ]には[ス], [ロ]には[ル]を充て, [ノ]には助詞の[ノ], [モ]には助詞の[モ], [コ]には[オ]を逆方向へ書く短線, [ホ]には[ユ], サ行とタ行には正規と変規符号二種を充て, [ト]には縦短直線を充てた。[ホ]には[ユ]を割り当てた。このような基礎符号の類似性から日速研式を早稲田式系統と見る可能性がある。

図 2-44 毛利高範：毛利高範(1867. 1. 10-1939. 6. 12)は, 肥後宇土藩主細川行真の次男として熊本で生まれ, その後, 豊後佐伯藩毛利高謙の養子となり藩主を継ぎ, 明治維新後, 1884 年子爵に叙せられた。田鎖の第 1 回講習会を受講し, 1888 年学習院高等中学校を終えてドイツへ留学, そのときドイツの草書派に魅せられて草書派創案を決意した。戒名は速記院殿開新高範大居士。

図 2-45 毛利式の符号の源図：毛利高範「毛利式速記法詳解」1927, p10 から作成した。

図 2-46 草書派ガベルスベルガー式の画線体系：Moser-Erbach, "Lebendige Kurzschrift Geschichte" p45 の表から兼子次生が作成した。ガベルスベルガー式の方角別符号表。

図 2-47 毛利式とファウルマン式の基礎符号 兼子次生成成：発音学の視点を持ったものの, 毛利はファウルマンの速記符号にとらわれずに毛利式の符号を改良した。子音では[サ], [ナ], [ハ], [マ], [ヤ], [ワ]6 符号は独自の符号を配分した。

図 2-48 毛利式の符号筆記帯を示す線譜：「毛利式速記法詳解」1927, p15, 草書派では速記

符号の筆記位置を定義しており、図の「い・に内」に書くものを二階文字、「い・は内」に書くものを一階文字、「い・ろ内」に書くものを半階文字と呼び、符号サイズは二階文字の場合、4.5ミリ(一分五厘)と定義した。

図 2-49 デーゲン式 1928 とシュトルツェ式 1841 の基礎符号 兼子次生整理：デーゲン式「新日本文字」では、シュトルツェ・デラ・シュパダ萬国発音速記法の基礎アルファベットと対応しながら速記符号を設定したとある。[K]とカ行,[S]とサ行,[T]とタ行,[N]とナ行,[H]とハ行,[M]とマ行,[R]とラ行,[W]とワに対応関係が認められるが、母音と Y・ヤ行には対応関係がない。謄写版の私家版資料を用いた。

図 2-50 いろは順に罫線用紙に書かれたデーゲン式の基礎符号：私家版「新日本文字」p17, デーゲンは日本語に堪能でないため普及を第三者に任せたことや、日本に定住しなかったので普及しなかった。

図 2-51 国際速記のもととなったクノウスキー式速記法：LebendigeKurzschri ftgesichte 1979, Moser-Erbach p76 基礎アルファベット符号。国際速記と呼ばれた日本語速記法は、クノウスキー兄弟のうち弟のフェリックス・フォン・クノウスキーが INTERSTENO の方式名で創案しエスペラント速記として普及した。「Kurzschri ft geschichte」1979, Moser・Erbach から引用。クノウスキー兄弟が創案した草書派方式はドイツでナショナル・ステノグラフィ National Stenografie 1898 と呼ばれる。エスペ란ティストの大場格はクノウスキー式の日本語版方式をつくり、日本のエスペ란ティストの間で広めた。厳密には新方式の創案ではなく、日本語対応版である。21 世紀初頭、普及活動を担ってきた深堀義文が死去すると、自然消滅したと見られる。

図 2-52 大場格設定の日本語用音節符号とクノウスキー式の子音符号 兼子次生整理：子音部分を[K]→カ行,[S]→サ行,[T]→タ行,[N]→ナ行,[H]→ハ行,[M]→マ行,[J]→ヤ行,[R]→ラ行に対応させ、一方母音符号をつくり、両音を組み合わせて音節符号を生成するものであった。一音節が最大 4 画に上るため、既存方式に伍することには不向きであった。そのため省略理論、略語辞書が求められた。

図 2-53 国際速記法による「青い山脈」歌詞の文例：出典「インテルステノ国際速記入門」著者深堀義文 2000.10.10 から引用した。

図 2-54 「日本語斜体速記法」1985。顔廷超：下段の符号は第二符号。顔は、満州建国大学在学中に西川伍朔から田鎖式を学んで正円幾何派の中国語速記法を考案していたが、戦後ソ連から伝来した草書派ソコロフ式(GESS)を参照して中国語の草書派を樹立した。堪能な語学力を活かして朝鮮語速記法、日本語速記法、英文速記法を創案した。「中国速記方式史」2004.9.16, 主編蔣朝参 には「1984 年、顔廷超又将斜体式引進到日語, 根拠他學習日語速記的經驗, 發明了((斜体式日本語速記)), 併編成教材,」, また「速記人生回憶錄」顔廷超著には「開創中文斜体速記学派」の中に「十, 我的((日本語斜体速記))創案」の見出しのもと、複画の基礎符号と基本的な書法を説明している。図下段の符号は第二符号。田鎖源一は一時期満州国に居住し、戦後ソ連軍の捕虜となった経験がある。

図 2-55 日英両用 EPSEMS 式速記法の基礎符号(日本語用)：平野明人は中速度を目標に草書派の方式を開発する目標を立て、2009 年創案した。

図 2-56 日英両用 EPSEMS 式速記法の基礎符号(英語用)：草書派で音節対応と音素対応の基礎符号を設計した英語用の基礎符号。

図 2-57 大阪毎日新聞の中根式速記創案の報道記事：京都帝国大学理工科大学土木科一年生、中根正親が独創的な単画式を創案したことが紹介され、速記界に新風を吹き込んだ。

図 2-58 中根速記学校で指導された主要理論(池田正一)：字音語尾音法則性に基づくインツクキ法の例：近代速記理論では表音主義がとられるが、中根式では縮記法として字音語を中心に二文字語において尾音に出現する現象をインツクキ法理論として組み込んだことが、二音文字などの略記法を主要理論とする複画、折衷派に刺激を与えた。「日本の速記」1957 年 6 月号に掲載された「わが式の誇る省略法—中根式—」を参照した。

図 2-59 中根正親の直筆文例：中根正親は学校教育活動に専念するため、速記関係の蔵書、資料等をすべて処分したが、偶然速記符号の自筆ノートが発見された。「ところ」が熊崎式と思われる符号など、現存する唯一の創案者直筆の速記原本である。

図 2-60 中根式速記法の基礎符号の変遷：中根正親、弟正世(正雄)、その次男、康雄の三代にわたる速記符号の改良が行われた。基礎符号では正親「中根式速記法講解」1916. 2, p21 のサ行、タ、トが 60 度(300 度)であったのを正世「通俗中根式速記法」1927 の第 1 表(森卓明「超中根式速記法」1931, p14)で 30 度(330 度)に変更されている。

図 2-61 中根式速記法の基礎符号の決まり 中根正親 中根式速記法講解 1916：基礎符号を生成する源図はピットマン式を参照しているが、曲線は 2 四分円、線分符号は 5 方角を用い、符号周囲の位置関係を「正側」、「負側」として定義している。山根式において「順」、「逆」と呼んで継承されている。

図 2-62 中根式系の基礎符号の多様化事例：岩村学「岩村式カナ早書法」1930、森卓明「超中根式速記法」1931, p14、古久保峯吉「国字速記講座(1)」1931, p1、土田利雄「土田式速記法」1934. 6. 1, p2、武部良明「学生速記」1940. 6. 25, p242-244、石村善左「石村式速記法」1952. 8、速記研究会報、植田裕「力行曲線なま行直線符号版」1957. 4、受講ノート、などの改良符号が派生した。それらの中で、森、国字、土田、武部、石村、植田らが多様な符号論争の跡を残している。

図 2-63 ピットマン式の符号源図：PITMAN'S SHORTHAND INSTRUCTION NEW ERA EDITION, p1. ピットマンの符号コンセプトは、グレイアムを通じて田鎖系初め、ガントレット、武田、中根へ大きな影響を与えた。

図 2-64 発話を文字化する速記の技術革新の進化：速記文明は普通文字の手書きから符号式へ進化して繁栄したが、機械式速記へ広がり、さらに電子化や情報処理面の自動化、人工知能(AI)へ進歩した。21 世紀に入り、人工知能技術が音声情報の処理、ビッグデータ処理、機械学習の進歩によって、人間に頼らない音声言語→文字言語への自動処理が可能になってきた。速記という技術体系は人間の介在を必要としないパラダイムへ広がってきた。



た。「速記」は“Speech to Text Technology”へ広がりを見せ、その象徴的なリアルタイム・生字幕が普及しつつある。

図 2-65 複画派からの単画化研究と純単画化の達成：森山式, 大川式, 北村式, 四年式については武部良明「日本速記方式発達史」1942. 11. 25 の符号を引用した。山根式については山根祐之「山根式速記」1951. 8. 1, p17 から引用した。

図 2-66 Moat 1833 における母音位置表象法：トーマス・モート Thomas Moat は 1833 年, モート式を創案し, その母音を表す理論として五線譜を用いて 4 段に子音符号を置くことで母音を表す位置表象法を採用した。

図 2-67 ルフェーブルのポジション式の文例：Karl Faulmann “HISORISCHE GRAMMATIK DES STENOGRAPHIE” 1887. 8, p. 335 では, 6 段の位置を用いて子音を表す方法を取り, 母音には田鎖式のように小さなサイン符号を設定している。右図のように書かれる言葉は 1 個の符号であった。

図 2-68 クロス式における音表象法：クロス式では, 速記符号のストローク, サインを置く位置を変えることによって前後に母音や子音, 音節がつくことを表すシンボライゼーション(表象法)を巧みに整えた。符号処理の視点からは線表象, 符号の周辺位置を利用する加点法や符号を置く位置の利用という視点からは位置表象, どの音を表すかという音表象がある。

図 2-69 クロス式の基礎符号：アメリカの J. G. Cross が創案したクロス式は正円幾何派の方式である。J. G. CROSS “ECLECTIC SHORTHAND 1902. p142.

図 2-70 同じ線長の符号における前音摘記法：「現代国語表象法」において例  $1+1=1$ , 例えば符号「ケイザイ」の音列を一種線の「ケイ」に短綴したり, 「ザイセイ」を同「ザイ」として省画化する規則。

図 2-71 5 方角でまとめた線分符号のグループ：「現代国語表象法」において線分符号を同じ角度のもので集めて 5 グループとする。A, B グループは上段, C, D グループなら中段, E グループは下段に符号を書く。

図 2-72 筆記位置：「現代国語表象法」における筆記位置(上, 中, 下)

図 2-73 「現代国語表象法」におけるストロークとティック・サイン：線分符号はその置かれる段によって決まった母音とン, ク, ツ, ○イ尾音を伴うことを示す。

図 2-74 「現代国語表象法」森卓明 の外国語用符号：英語などよくあらわれる母音, 子音を表すサイン符号を定めた。

図 2-75 グレッグ式と早稲田式の運筆の違い：凹型の横曲線はラテン文字の筆法と日本語の筆法で, 力を入れる位置が書き始めと書き終わりに分かれる。草書派, 半草書派であっても文字の筆記習慣から筆記の好みは同じではない。

図 2-76 国字式の符号生成ダイアグラム：古久保峯吉(国字)は自然円と呼ぶ手書きの楕円から基礎符号を割り当てたが, それらは自然な書字運動の要素であった。中根系の石村善左にも影響を与えて, 単画派の成長に刺激を与えた。

図 2-77 国字式の基礎符号の花 兼子次生成成：国字式は純単画派として完成された。符号資源の配分はシンプルで、中根式の濃線符号、加点符号を基礎符号からなくした。符号の花は国字式が縦方向を好んだことを示す。

図 2-78 国字式寿光速記法の五段法：国字式は戦後、森卓明の影響を受けて、クロス式の理論をヒントにした五段法を採用し、寿光式と称した。図 2-78 から図 2-81 まで図は「日本の速記」1958 年 4 月号から引用した。

図 2-79 字音語速記符号の符省法（国字式寿光速記法の例）：「日本の速記」1958 年 4 月号から引用した。

図 2-80 国字式寿光速記法の五段法による文例 国字寿光：古久保峯吉（国字）は縦方向の筆写に努め、速記用紙が少なくてすむような符号綴りを好んだことが感じられる。「日本の速記」1958 年 4 月号から引用した。

図 2-81 国字式と山根式の基礎符号（注）両式の基礎符号は必ず中心線から書き始める 兼子次生整理：中根式から国字式が派生する際、古久保峯吉（国字）は新しい図形源を幾何的な楕円に求め、多曲線と命名した。弟子山根は山根式を成案する際に師の術語を継承した。山根はナ行、フ、マ行、ヤ行、ラ行（ルを除く）を説明する際、多曲文字と呼んだ。しかし、山根の基礎符号練習では楕円の一分を取り出した形を厳しく守らせて、実体は幾何的な楕円ダイヤグラムを併用する正円楕円幾何派として完成された。中根式の大丸かぎをつけた符号形（有鉤線）とは明確に異なるものであった。右小指を紙面にそえて書く正円幾何派と違って、幾何楕円を筆記するために右手を空に浮かせる懸腕の書法をとる点が特徴であった。

図 2-82 山根式の基礎符号の花 兼子次生成成：山根速記学執では一時、国字式の一式二符号現象を生じていたが、国字の要求により国字式旧版の指導を打ち切り独立を目指して新方式山根式一本に切りかえた。そのとき、山根は国字式の問題点と感じていた線配分を横への流れに切りかえたことが、図 2-76 の国字の基礎符号の花とこの図を比較すればわかる。

図 2-83 山根式の速記理論概要図：山根式では基礎符号を変更したが、速記理論は国字式旧式をほぼ踏襲した。しかし、五段法など寿光式の理論は取り入れなかった。「日本の速記」1957 年 12 月号から引用した。

図 2-84 石村式的主要符号改訂表：中根式速記法を用いた速記者の中には正雄版の体系を守るものと、符号の改良を行うものがいたが、石村善左（禧行）は中根式改良を積極的に進める立場をとった。その始まりは中根 24 年式だとされてきたが、本研究中に中根 23 年式と呼ばれる体系があったことが発見された。改変回数がわからないほど変更は多く行われたことは驚異的なことである。しかしその足跡を正確にとらえることはできない。なお、石村は自式を日本速記協会推薦方式と称したが、1956 年協会の速記教育委員会で 11 推薦方式を決めたものの理事会はこれを承認せず廃案となってきた。

図 2-85 石村式の文例：数え切れないほど基礎符号を改変したものの、石村の書く速記符号はほぼ一定のイメージを持っていたことは不思議な現象である。鳥取県速記士会会報

1955年2月8日発行 p7 を引用した。

図 2-86 長商式の基礎符号 1953 小西佐都志：石村の影響を受けた小西佐都志（旧制中学校の長崎商業学校，長崎高等商業学校卒）は，小西は中根式に，石村式，衆議院単画符号理論を重ねて，長商式を創案した。「日英同時速記法」（長商式速記一代）1996. 6. 1, p17 を参照して整理した。

図 2-87 長商式の加点法：小西は長商式に加点法を導入した。「日英同時速記法」（長商式速記一代）1996. 6. 1, p87 から引用した。

図 2-88 回転運動の効用を探究した実験：高速度の発話に対応する速記符号の筆記運動は参議院の畑田明は反発運動よりも回転運動にあると仮定し，立証を試みた。緻密なデータをもとに参議院式の高度化が図られた。1952. 9. 20, 京都速記士会編速記発表 70 周年記念文集「速記・研究と回顧」の「符字論」p1 から引用した。

図 2-89 ガベルスベルガーの美しい早書き書体：幾何派を追ったイギリスに対して，ドイツは自然な書きやすさを速記に求めた。草書派を完成したガベルスベルガーは早書きのために美しい筆記体符号をつくった。Lebendige Kurzschriftgeschichte Moser-Erbach 1979, p96-97 から引用した。

図 2-90 グレッグ式の筆記体要素からの符号生成法：グレッグの基礎符号を設定する考え方を側近が書き残した。” JOHN ROBERT GREGG” 1963, F. ADDINTON SYMONDS から引用した。

図 2-91 永字八法図：書道では「永字八法」だが，それは速記書きには適さない。「永字八法」の名で，書法伝授や手習いの初歩的段階の一方法として用いられてきた。各部の名称は筆順に従って(1)側(そく)（第一筆の点）、(2)勒(ろく)（第二筆の横画）、(3)努(ど)（第三筆の縦画）、(4)趯(てき)（第四筆の撥）、(5)策(さく)（第五筆、左から右上に引く画）、(6)掠(りやく)（第六筆、続いて左下へ引く画）、(7)啄(たく)（第七筆、右から左下に引く画）、(8)磔(たたく)（第八筆、左から右下に向かって引く画）の8法(コトバンクから引用した)。カットは「漢字百科大事典」1996. 1. 19 の佐藤喜代治編集「楷書処方の方則」から用いた。

図 2-92 スローン-デュプロワエ式の母音(1)：グレッグは母音の表記に主流のポジションを採用せず仏デュプロワエ式の英語版スローン・デュプロワエ(SD)式の連綴母音を採用した。これがグレッグ式に書きやすさをもたらした。SD式にはこの連綴母音のほか，加点母音もある。The Sloan-Duployan Phonographic Instructor 1913, James Matthew Sloan, p6 から引用した。

図 2-93 グレッグ式系統の日本語速記方式と基礎符号 兼子次生成成：グレッグ式(アニバーサリー版，1929)は書きやすいことと簡単な理論であることが好まれて日本語へ翻案する動きが続いた。最も有名な酒井式(「酒井式速記法講義教材」1936)は既存方式のように単画式に近づこうとした。日本グレッグ式(P. H. Burdick, 岡村キクエ「日本グレッグ/シヨートハンド」)は母式のように音素主義を採った。タクマ式(宅間清太郎「日英両用タク

マ式速記術」1935)は表音主義に忠実に子音+母音体とした。かっこ内は参照した方式書。  
図 2-94 母音を子音符号の中で表す, Mignon 1874, “Sténographie phonétique”に見られる同母音同方向の例: 出典: A. Navarre, Stenographie, 78p. 1906, ミニヨン式 1874 に見られる同母音同方向の例から引用した。

図 2-95 V式の基礎符号 小谷征勝 1975: 同じ母音を持つ音節は同じ方向へ書く着想。

図 2-96 SVSDの文例 小谷征勝 V式: 1975年版理論。

図 2-97 幾何派方式に避けられないズリ現象: 横一直線に続いたり, 右下や左下へ連続するズリ現象は手書き速記では嫌われる。フランス語のロビー式はズリだけでなく, 一文を一筆化するように書いている。符号は, K. ファウルマンの”HISTORISCHE GRAMMATIK DER STENOGRAPHIE” 1887, P321 から引用した。

図 2-98 TIMACEの基礎符号と連綴例: 岡村隆博は1982年, ノートの一行内に収まる一行速記を考案した。

図 2-99 毛筆で書いた俳画: 日本人は文字とその書き方を中国から受け入れたが, それだけでなく, 日本語らしい文字の書き方をつくり出した。それは続け字や仮名の書法にあらわれている。平仮名は縦書きで続け書きし, シャープペンシルで書くのに適している。図は, 兼田幸苑の俳画集「四季の気韻」2010発行, p50から引用した。

図 2-100 フコト点: 村上雅孝「国語学研究事典」。経文を日本語として読むためにつくられたフコト点は速記ではない。しかし, 速記理論には利用できると考えられる。

図 2-101 日下部式の基礎符号, 「写言術」, 1910, 日下部忠次: カナ速記初期の日下部式は未完成ながらカナ速記研究を盛んにした。「日本速記方式発達史」1942. 11. 25, 武部良明, 図27を参照した。

図 2-102 中根正親の仮名からの符号説明図: 教授法として正親は符号の成立を印象づける工夫を凝らした。「中根式速記法講解」1916. 5, p23から引用した。

図 2-103 岩村式カナ速記の変遷(1) 兼子次生作成: 岩村式の主流版を中心に比較すると, 少なくとも4段階の基礎符号の進歩があった。①創案時(1930): 「日本速記方式発達史」1942. 11. 25, 武部良明②(1943) 岩村学「最新カナ速記法講義」③(1949) 岩村八重子「岩村式カナ速記(決定版)」④(1955) 関根雪峰「立川速記者養成所版」—を参照して整理した。

図 2-104 中根式京都速記学校の記念写真: 前列左端が中根正世, 隣が中根正親。岩村學は前列左から2人目。

図 2-105 関根雪峰による岩村式カナ速記の文例: 立川速記者養成所のパンフレットから引用した。

図 2-106 岩村式カナ速記における段階順で変化する速記符号: やさしく学んで, 段階を経るにしたがって難しくなる学習法がとられた。立川速記者養成所のパンフレットから引用した。

図 2-107 岩村式カナ速記の変遷(2) 兼子次生作成: 岩村式から派生した方式として深堀式,

相賀式, 木村式, イトー式があった。イトー式は名古屋中心に普及活動が行われた。(深堀式は中田知の版による)

図 2-108 イトー式の(加点)助詞法: 伊藤勝治(勝持)は加点助詞法などを研究した。「日本の速記」1957年11月号「アスの速記のために—イトー式—」イトー カツジ p14を参照して整理した。

図 2-109 岡山大学速記研究会におけるカナ方式の相賀式と木村式: 太平洋戦争ごろから戦後高度経済成長期に岡山県下に高鳥富士男を含めたカナ3方式が協調しながら活動した。

図 2-110 深堀カナ宇宙式速記法の文例 中田知: 深堀義輝が指導した中田知は深堀の基礎符号体系を継承し, 赤穂市議会の記録と普及につとめた。

図 2-111 岩村式カナ速記の変遷(3)兼子次生成成: 岩村式から刺激を受けて, カナモジカイ式(1946), 寺谷式(1949), 三村式(1963), 植岡式(1950)などがカナ速記をはなやかに彩った。同会の理事長を務めることになるマツサカタダノリも独自に速記分野に進出した。

図 2-112 カナモジカイ式の文例 田中佐智子: 岩村学はカナモジカイ運動に加わっていた。国語速記発表110年記念事業「速記符号集」p37から引用した。

図 2-113 寺谷式の速記文例(創案: 寺谷武): 榊原守正は中日新聞社の電話速記に寺谷式を用いた。

図 2-114 西来路秀男による標準式速記文例(上がカナ式, 下が符号式): 衆議院の西来路秀男はカナ速記を考案した。「速記入門ハンドブック」1955. 11. 15, 西来路秀男, p109から引用した。

図 2-115 西来路秀男による単画標準符号とカナ速記の素音符号: 衆議院式の高速度理論がカナ速記へ組み込まれた。「速記入門ハンドブック」1955. 11. 15, 西来路秀男, p69-114から引用した。

図 2-116 カタカナ, ひらがな使用の簡易速記法のヒント: 中根正雄 1958: 中根は図のような合字的な着想から, 普通文字を使った個人用仮名速記を考案した。2003. 3. 30「速記一筋」中根正雄自叙伝, p217から引用した。

図 2-117 「簡易速記法」の表記法体系 中根正雄, 1958: 1972. 9. 10「簡易速記法入門」中根正雄, 口絵写真

図 2-118 自衛隊の「口達会報」: 自衛隊で黒板の連絡版に簡易速記が用いられていた。「中根正雄先生を偲んで」1995. 8. 22, p48から引用した。

図 2-119 幾何派, 草書派における符号の多様性: 符号速記には幾何派, 草書派, 半草書派の3タイプがある。「速記研究」兼子次生 p89から引用した。

図 2-120 実線の速記符号と送りの搬送線の関係: 「搬送線原理」寺井美巳 1952. P25から引用した。早稲田式では方式理論研究, 技能形成, 教材開発などに組織的に, 科学的, 合理的な取り組みが行われた。

図 2-121 平仮名の続け書きの動き: 平仮名は日本人の筆法のベースであり, 続け書きできる点で優れ, 早書きに適している。小林龍峰「たちまちうまくなる字の本」1979で3文字

単位の続け書きを提案している。図は p149 から引用した、新古今和歌集、小野小町の「ふきむすぶ かぜは むかしの 秋ながら ありしにもにぬ そでのつゆかな」

図 2-122 泉式全音速記法の基礎符号 1969 乙部泉三郎：「泉式全音速記」1969. 10. 28, p1 から引用した。日本文字の筆記運動を分析研究して書きやすい符号改良が行われた。

図 2-123 泉式全音速記法の濁音, 半濁音符号表: 同上, p4 から引用した。: 乙部は濁音, 半濁音を正確に書くことに力を注いだ。

図 2-124 泉式全音速記法による文例 乙部泉三郎 1940: 鳥取県速記士会会報の特集記事「全国主要速記方式符号紹介」から p8 の速記文例を引用した。

図 2-125 伊東式ひらがな速記の基礎符号 1951 年ごろ根田良子による符号は、ひらがなの部分を取り出して基礎符号をつくる原理を示して設定された単画基礎符号を示している。兼子次生整理。

図 2-126 伊東式ひらがな速記の文例: 伊東稔はひらがなと符号を調和させた。現代国語速記法における速記符号文例集 p10 から引用した。

図 2-127 カナ, かなを統合した三村式の文例: 頭から読んでも後ろから読んでも同じになる回文歌の文例。「タテ書き速記」1964, 三村侑弘: 裏表紙「長き夜の十(遠トモイウ)の眠りの皆目覚め波乗り船の音の良きかな」を引用した。

図 2-128 三村式のいろは歌文例 三村侑弘: 左から右へタテ書きで進む三村式は、文字のように読みやすいとする。「タテ書き速記」1964, 三村侑弘の表紙裏から引用した。

図 2-129 「傳音快字」の縦書き文例 蔡錫勇 1896: 蔡璋が父, 蔡錫勇の筆記体系を改良して中国速記学を創始した。中国語最初の符号式速記法。傳音快字から引用した。

図 2-130 三村式タテ書き仮名速記法の基礎符号 三村侑弘 1964: 一つの音に複数の符号があり, 複雑になった。「タテ書き速記」から整理, 引用した。

図 2-131 三村式における基礎符号の連続練習課題例: 基礎符号の練習法が工夫され, 多種類の基礎符号を最適使用する技能が求められた。練習の始めと終わりに行うことによって, 速記符号を続け書きがなめらかさを磨く。「タテ書き速記」から整理, 引用した

図 2-132 同一文を符号式(左: 衆議院単画符号)と仮名式(右: 三村式タテ書き仮名速記法)で書いた文例: 符号式は衆議院式で西来路秀男よるもので, 三村式タテ書き仮名速記は三村侑弘の筆。両文例は同じ文を書いている。

(注)

- 1 手書き速記が繁栄期にあった 1983 年に日本速記協会が発行した会員名簿を集計した橘孝幸によると, 方式数は 59, 速記者数は 6, 174 名であった。ただ, 速記方式名欄に指導者名を書いた者がいたり, また速記技能検定試験を受けないで日本速記協会に加盟した者が含まれているため正確な速記方式数, 速記者数, 速記士数はわからない。
- 2 武部良明著「国語速記史(上)」に, 大学南校に学んだ田鎖綱紀が明治 5 年ごろから国

語速記法の創案に向けて活動を始めて、明治 15 年に田鎖式を公にするまでの間の経過を解説している。

- 3 英国ウェールズ出身のガントレットはカナダ経由で来日し、パイプオルガン奏者、英語教師として東京商科大学などで活動した。1890 年 8 月 14 日来日以来、日本語速記法の考案に取り組み、5 年を費やしてガントレット式を完成した。「新日本語速記術」発行に当たり、緒言に「主にサー・アイザック・ピットマン先生の発明せられたる英語速記法に基づきて編述せるものなれども、英語と日本語との異同あるにより余の発意に係るもの亦尠しとせず、例えば其記号の長さによりて母音を表わし、又記号の位置の異なるによりて意義を異にし、或は母音の重複を表わすには楕円又は鉤を用ふる方法の如きは其重なるものなり。余の既往 5 カ年間の研究によるに此等の方法は従来 of 日本語速記術に於ては未曾て見ざる処なりと信ず」とピットマン式系日本語速記法であると述べている。ガントレットはエスペラントを日本へ紹介した先導者で、草書派ではデーゲン J. A. Degen がデーゲン式を創案し、エスペラント語速記のクノウスキー式（国際速記）の日本語版が大場格によって出版されている。ガントレットは山田耕筰の姉と結婚し、日本に帰化した。
- 4 オーシック式 Orthic system は、ケンブリッジ式 Cambridge system とも呼ばれ、ケンブリッジ大学トリニティカレッジ・フェローのカレンダー Hugh L. Calender が 1890 年に創案した。アルファベットと筆記体の筆記原則を速記符号の正書法に適用した。(1)用いる線條は 2 種類の長さとし、(2)濃淡差を放棄し、(3)連綴母音を採用する点の特徴の英文速記方式である。
- 5 フランス国会の速記者、ナバル Albert Navarre は世界の速記事情を調査し、定期的に「ステノグラフィ」Stenographie を刊行し、1909 年版に日本の国会速記の始まり、方式発達について紹介し、ガントレット式の創案などについて記述した。国会速記の関係では田鎖式からガントレット式に転換して活躍した藤田直助の肖像写真を掲載した。
- 6 「日本速記五十年史」1934 年 10 月 28 日、編者浅川隼、日本速記協会発行、同書の p 59, p 60 に武田千代三郎による武田式の記述がある。官選知事の武田は任地替えの休暇を利用して東京大学在学中に読んだピットマン式を参照して単画式速記法を創案した。赤根谷友三郎が実務に利用できるまでの技能に達し、朝鮮において改良、速記者養成に努めたとある。当時複画から折衷へ進む時代にあつて、より簡単な単画へ進むべきだと武田は主張した。
- 7 熊崎健一郎がどのような経過で折衷派の熊崎式速記法を創案したかは、熊崎自身が「新式簡明速記学教授書」（1906 年 3 月）に記述している。田鎖式を学んで、方式の改良に取り組み、田鎖式系と最新ガントレット式を折衷した符号とした。速記独習論を主張し、速記書は独学に対応する内容とした。熊崎は新聞社の電話速記に従事していた関係で、熊崎式は新聞通信社に普及した。その後、熊崎式姓名学を創始し、速記界から退いたため、弟子たちが普及、改良活動を継承した。熊崎は熊崎と書かれることが

あるが、戸籍名の熊崎を本稿では用いた。また、除籍謄本で熊崎は 1881 年 5 月 5 日生まれ、1961 年 8 月 25 日没であり、日本速記年表に書かれている 8 月 24 日没は誤り。

- 8 グレグ式における基礎アルファベットの生成法は、シモンズ著“John Robert Gregg”, 1963, by Addington Symonds によると、理想的な速記法の 5 つの本質と呼ぶ目標を掲げた。(1)速記の基礎符号には独立形の母音符号が含まれている必要がある。子音符号は子音同士の画線と続け書きできる必要がある、(2)速記符号はすべて勾配（スロープ）を持たせて書く必要がある、(3)速記符号は濃線と淡線とを書き分けてはならない、(4)速記符号は速記ノートの中央の一段（中心線）だけで書く必要がある、(5)速記の略語は確実に書き読みでき、包括的で、少数でなければならない。

そして固有の 7 点の基本原則を指標として決めた。

(1)速記符号の筆記は曲線運動をしている必要がある、(2)画線の自然な組み合わせから鈍角接続を排除する必要がある、(3)鈍角接続を排除するために画線の自然な組み合わせを目指す必要がある、(4)速記符号を綴る場合、母音と子音とを接続できる必要がある、(5)速記符号に用いる画線は濃淡をなくす必要がある、(6)速記符号の筆記は、中心線に沿って、一段だけを用いて行うようにする必要がある、(7)全体として速記符号は一次元的に書かれる必要がある。つまり書き込みは直線の延長上に連続可能な流れで実行される必要がある。

- 9 日下部忠次は「写言術」1910. 2. 25 において「日本在来の片仮名文字を用い、速記術と同様に筆記するを得るなり」とカナ速記を創案したねらいを述べている。田鎖以降、国語速記方式は「これ本邦言語を欧州各国の言語と同一視し、適当せざる符号を以て記せんとするが故に正法を求むを得ざるなり」と考え、カナ速記では(1)完全に筆記し、(2)翻訳を要せず、(3)心身を傷めず、(4)筆記原書は何人にも読み得、などとした。武部良明はここで日下部案がカナ速記の可能性を立証したと評価している。

- 10 岩村式系において、岡山県下で太平洋戦争前後から、相賀、木村、富士の 3 方式が共存関係で普及されていた。1983 年の速記者名鑑には、相賀庚の相賀式 3 名、高鳥富士男の富士式 4 名、木村嘉男の木村式 19 名の名がある。このころは木村が活躍期にあると思われる、カナ速記が吉備路で盛んであった。ちなみにカナ速記では岩村式が 12 名を擁し、カナ式（系統不詳）14 名、深堀式 5 名、イトウ（のちにイトーと改めた）式 4 名、三村式 3 名、カナモジカイ 2 名、ひらがな 1 名となっていた。

- 11 蔡錫勇説：“一声一韻，兩筆相連，切成一音。”这就是拼音。可是《伝音快字》是要求直行筆写，而行序發展却又是從右到左。真到蔡璋改編後的《中国速記学》仍是如此。符号以位置分別四声，規定”写法須用直行格紙筆之，偏左而近者去声，偏右略遠者為入声。上平則声予韻連筆，下平則声予韻分筆“。由于採用位置法區別四声，因而一般複音詞便無法連写。後來蔡璋為了採用”連書法“以加快速度，不得不部分地廢除四声。即只是複音詞的第一符号分四声。

略由于採用位置法區別四声，因而一般複音詞便無法連書。（出典：「速記知識」北京市



速記協会編)

(著者)

- 1 兼子次生 : INTERSTENO(International Federation for Information and Communication Processing), 速記・言語科学研究会, 速記科学研究会, (公社)日本速記協会, 日本国際秘書学会, アメリカ法廷速記者協会 (N C R A)    tsuguo.kaneko@gmail.com
- 2 菅原登 : 速記科学研究会, (公社)日本速記協会 n.sugawara@bridge.ocn.ne.jp
- 3 下谷政弘 : 京都大学名誉教授, 福井県立大学前学長, 住友史料館館長, 速記科学研究会, (公社)日本速記協会, shimotani@shiryokan.jp

凡例

音声を意味するために//で文字を囲んだ。/a/は a の音を示す。

速記符号, 文字を意味するために[]で囲んだ。[ア]はア, またはあの文字を示す。

言葉を意味するために「」で囲んだ。「意」は意の言葉を示す。